

清酒

偶有九醞之名作八醞字當之也本居氏引再下麴解八鹽折酒者非是

〔書言字考節用集六〕服食醞法酒清者曰醞清酒聖人謂濁者為賢人出魏志

〔嬉遊笑覽飲上〕酒の今の如く清酒になりしは、一百年以來の事となん、今も邊地には濁酒を用唐

山なども濁酒多しと聞ゆ、酒の詩などに、浮白といへるも此故、天香樓偶得、古人酒以紅為惡、白為

美、蓋酒紅則濁、白則清、故謂酒為紅友、而玉體、玉液、瓊飴、瓊漿等名、皆言白也、梁武帝詩云、金杯盛白酒

正言白酒之美、近來造酒家、以白麴為麴、并春白秫和潔白之水為酒、久釀而成、極其珍重、謂之三白酒

於是呼數宿而成之、濁醪曰白酒、使詩詞家不敢用白酒字、失其旨矣、この白酒といへるも、猶にこり

酒なるべし、建仁寺の河清酒樽に書る詩、見時如白水、飲則勝丹砂、八十老翁面春風、二月花などい

へり、これに依て思ふに、古き連歌俳諧に酒を飲ことを霞を汲といへるも、かすみとは、濁れるを

いふなり、又唐人酒を聖賢にたとへて呼、聖と稱するはすみ酒なり、寒山詩、滿卷才子詩、溢壺聖人

酒なども、云へり、日蓮上人錄内錄外等に、聖人一筒とあるはた、酒を云へり、

〔延喜式一〕四時祭鎮花祭二座

大神社一座 清酒五升、濁酒六斗五升、
狹井社一座 清酒五升、濁酒六斗五升、

〔延喜式三十九〕諸節供御料

正月三節略中 清酒、濁酒、酢油各一斗五升

〔延喜式四十〕釋奠料春秋

醴齋、醢齋、清酒各二斗、別貢清酒三斗六升、已上酒一石七斗三合雜給

〔播磨風土記佐用郡〕彌加都岐原難波高津宮天皇仁之世、伯耆加具漏、因幡邑由胡二人、大驕、无節、

以清酒洗手足、